慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ある社会学者の闘い：P・A・ソロキンの数奇な生涯
Sub Title	A Checkerd Career of Pitrim A. Sorokin
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2004
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.77, No.1 (2004. 1) ,p.149- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川合隆男教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20040128-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある社会学者の闘い

――P・A・ソロキンの数奇な生涯――

藤田弘夫

はじめに
第一章　ソロキンと今日の社会学
第二章　北ロシアでの漂泊と職人生活
第三章　革命運動とペテルスブルク
第四章　学者と政治家：革命と戦争
第五章　アメリカでの栄光と孤立
第六章　社会学会との対決と追放
第七章　社会学界の無視と和解
第八章　ソロキン評価の知識社会学
第九章　ソロキンと二一世紀の社会学

はじめに

P・A・ソロキンの名は社会学徒なら、どこかで聞いたことがあるだろう。ソロキンの名は社会学の多くの分野で先駆者として登場する。しかしソロキンの名前はほとんどの社会学徒にとって、それ以上の存在ではないだろう。M・A・ローマノは最近ソロキンを『忘れられた社会学者再考』のなかで、取りあげている。[1] ソロキンはペテルスブルク大学の最初の社会学の教授であり、ハーヴァード大学の最初の社会学の教授という輝かしい経歴をもっている。

ところが、ソロキンの名がアメリカの社会学者のあいだで、反発と無視なく語られるようになったのは、皮肉なことにかれの名が忘れられかけている最近のことなのである。B・ジョンストンのことばを借りるなら、ソロキンは激しいエネルギーとロシア人的情熱をもって、二世代にわたるアメリカ社会学者を激しく罵倒し、嘲笑し、皮肉り続けたのである。これに対して、アメリカの同世代の社会学者とその弟子たちはソロキンの研究をまともに取り上げず、教室と学会で沈黙をもって報復し続けたのである。[2]

ソロキンの著作はロシアにあっても、長いあいだ禁書とされていた。アメリカの社会学者以上に、ロシアの研究者にとって、ソロキンの名は半世紀以上にわたって反革命分子として汚名と恥辱に満ちた忌避すべき社会学者の名だとされてきたのである。

第一章　ソロキンと今日の社会学

ハーヴァード大学の社会学部は一九八九年、ソロキン生誕一〇〇年を祝った。国際比較文明学会は、一九八八

年、一九八九年、一九九〇年の大会で三年連続して、ソロキンの特別セッションを開催している。かれは晩年にある程度の復権を遂げたとはいえ、アメリカの社会学者のあいだで、半世紀以上にわたる無視と軽蔑のなかにあった。最近、ソロキンの学問を、改めて位置づけようとする気運が高まっている。[3] とくにB・ジョンストン(Barry V. Johnston)の研究は、かれの学問を改めてとらえ直そうとする幾多の視点を投げかけている。これまで、タブーとされてきたソロキンについての多くの事柄が公然と語られるようになった。

ソロキンは共著を含めて三七冊の単行本と一二四編の論文、短いものまで入れると四〇〇篇あまりの論文を書いている。単行本はどれも大部なものである。五〇〇頁を越える本も少なくない。とくに主著の『社会と文化のダイナミックス』にいたっては一冊と計算したが、実際には四分冊で三〇〇〇頁近いものである。おそらく社会学者のなかで、ソロキンはもっとも多くの著作を著した学者であるかもしれない。

しかもかれの著作は、ほとんどが早くから複数の言語に翻訳されている。たとえば『現代社会学理論』(一九二八年)にしても、ドイツ語、フランス語、スペイン語、チェコ語、セルビア語、トルコ語、ヒンディー語、中国語に翻訳されている。日本でも、この本はすぐれた学説史や理論書としてさまざまな著作でずいぶん言及された。しかし一九三〇年に部分訳が出されたものの全訳はついに出版されなかった。

ソロキンの著作は実に多くの言語に翻訳されている。かれの著書は一九七一年までに、ドイツ語、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、スウェーデン語、オランダ語、フィンランド語、ノルウェー語、ロシア語、ラトヴィア語、チェコ語、セルビア語、トルコ語、ヒンディー語などインド諸語、中国語、日本語など世界中の言語に翻訳されている。インドでは英語版のみならず、さらにヒンディー語などの他の言語版が出ている。[4] このことは、ソロキンの著作がインドでいかに広く読まれているかを示すことにもなっている。ソロキンの著作は日本語には、これまで一〇冊が翻訳されている。社会学者でこれだけの著作が翻訳されている学者もそう多く

はない。

ところで、ソロキンは日本において四つの顔をもっている。まず、もっとも古いのが農村研究者としての顔である。ソロキンの著書は戦前から高等農林など農業関係の教育機関で読まれていた。吉野正樹の翻訳で『都市・農村社会学原理』が、一九四〇年に出版されている。

第二番目は、社会学者としての顔である。かれの研究分野は社会学理論、社会学史、社会移動論、都市論、農村論、時間論、災害論など広範な分野に及んでいる。しかし今では、社会学の各研究分野で、もっぱら孫引きされる学者となっている。ソロキンは忘れられた社会学者になりかけている。日本の社会学史の本からもソロキンの項目が消えている。ソロキンについての章が唯一あった新明正道編『現代社会学のエッセンス』（一九七二年）も、一九九六年の改訂版の出版にあたって、かれについて書かれた章は削除されている。(5)

第三の顔は、文明論者としての顔である。C・シュペングラー（Oswald Spengler）にはじまりA・トインビー（Arnold Toynbee）、A・クローバー（Alfred Kroeber）、A・ウェーバー（Alfred Weber）などに連なる文明論者としてである。学説史家として名高いD・マーチンデール（Don Martindale）は大著『社会学理論の性格と諸類型』で、ソロキンの有機体論者としての側面を強調して論じている。日本では、山本新がトインビーの「文明論」などとのかかわりでソロキンを紹介してきた。(6) 最後に、ソロキンのもっとも新しい顔となっているのが、教育学者としての側面である。かれのハーヴァード大学の創造的利他愛研究センター（The Harvrd Research Center in Creative Altruism）での「人間愛」に関する晩年の著作が紹介されるとともに翻訳刊行されている。

このように日本でいくつもの顔をもつソロキンの学問は、どのようなもとで形成されたのであろうか。かれはロシアのセント・ペテルスブルク（ペトログラード）大学の社会学の初代教授であり、ハーヴァード大学の社会学の初代教授という輝かしい経歴をもっている。しかしその一方で、数ある社会学者のうちで、かれほどアメリ

カやロシアで軽蔑と無視の対象とされた学者もめずらしい。

ソロキンは数奇な運命のもとにアメリカにたどり着いた。かれ自身もこのことを自覚していた。かれはアメリカへの移住直後、ロシア革命での体験を『ロシアの日々からの別離』に残している。また、晩年には『長い旅』と題する自伝を書いている。かれは強烈なパーソナリティとエネルギーで時代を駆け抜けた。かれの人生は、まさに波瀾万丈というにふさわしい人生であった。では、かれの生い立ちから追ってみることとする。

第二章　北ロシアでの漂泊と職人生活

ピチリーム・アレクサンドロヴィッチ・ソロキン（Pitirim Aleksandrovich Sorokin）は一八八九年、ロシア東北部のウラル山脈に近い奥地のコミ地方のボログダ州ヤレンスキー地区のツーヤ（Turya）村に生まれる。母はアジア系に分類されるウグロ・フィン系の農民の娘であったという。父アレキサンダー（Alexsander Prokpievitch）はロシア系でイコン（聖画像）の製作や金銀の装飾職人であった。一家は仕事を求めて、コミ地方内を村から村へと遍歴しながら生計を営んでいた。コミ地方はウラル語系のコミ語とロシア語のバイリンガルであり、キリスト教以前の異教の伝統を強くもっていた。人口約二〇〇〇人のウスト・シソルスク（Ust Sysolsk）が、この地方の行政、商業、文化の中心となっていた。

ソロキンの最初の記憶は三歳の時に死んだ母の葬儀だという。母の葬儀の場面からはじまるかれの『自伝』は感動的でさえある。かれは母については死以外、何も知らないという。[7] 母の死後、弟のプロコピー（Prokpiy）はリミア（Rimia）に住む叔父のヴァシリー（Vassiliy）と叔母のアニシア（Anissiya）に引き取られた。叔父は農民であり猟師であった。叔母は自然人であった。アニシアは母のかわりだった。叔母は心やさしい人であった。

図 1　Federal Service of Geodesy and Cartography of Russia, *The World Atlas*, Third Edition, Moscow, 1999.

図2　MacMillan Centennial *Atlas of the World*, Revised Edition, Falk Verlag, Germany, 1999, pp. 88-89.

かれは晩年に、もし叔母がいなかったなら、自分の性格はもっと激しいものとなっていただろうと回顧している。[8] 父は仕事をもとめて兄のヴァシリー（Vassiliy）とピチリームをともなって、コクヴィツィー（Kokvitzy）村を離れて放浪する。

かれは後に、いつどこで読み書きを習ったのか忘れたといっている。おそらく漂泊の途中で父や兄に読み書きをならったのだろうという。やがてかれの身の上に大きな事件が起こる。やさしい父も飲酒をすると人が変わったように乱暴になった。あるとき父は妄想にかられ兄の肩をハンマーで叩きピチリームの口を突いた。この事件の翌日、父と兄弟とは別々に暮らすことになる。かれは一一歳のとき父と別れて一五歳の兄と漂泊しながら職人として生活することになる。父も一年後に兄弟たちが遍歴していたところからさほど遠くないところで亡くなるが、兄弟が父の死を知ったのは、死後一ヵ月以上たってからだった。[9]

孤児同然となった兄弟は二年間、村から村へと漂泊しながら遍歴の職人として生活をしていた。歩きながら新しい村に入ってくると、村の人たちは友好的か、それとも敵対的か、村に仕事はあるか、食べ物と寝る所は確保できるか、村びとは自分たちをどのように扱うかを見極めなければならなかった。かれは教会のイコンやその金銀の装飾であるリザを作ったり修理したりするのを楽しみとしていた。かれは兄よりも腕のよい職人だった。しかし兄はすぐれた統率力をもち総合的な力があったという。大きな教会のあるヤレンスク（人口約一〇〇〇人）に着いた時、はじめて都市的世界に誘われていった。

兄弟はひとつの村に二、三ヵ月ほど滞在しては、また仕事を求めて遍歴するという不安定な生活をしていた。かれらの生活は新しい状況、新しい道徳との常なる出会いであった。それが兄弟たちの心理的、道徳的学校となった。[10] ピチリームが最初に勉強を習った先生はリミアの農民の女性で村の児童二、三人を自宅で教えていた。たまたまガム村で働いていた時、新しい学校の公開入学試験が行われた。この試験に合格し、五ルーブルの奨学金

を得る。かれは奨学金と兄の仕事の手伝い、叔父の農場の手伝いにより学費をまかなうことで、学校に行くこととなった。

第三章　革命運動とペテルスブルク

ソロキンはガム村の高等学校を一九〇四年一四歳で卒業した時、教師と地区の高等教育機関に上級学校に進むことを勧められる。わずかだが奨学金も用意されていた。そこでコストモラ地区にあるクレノボ（Khrenovo）師範学校に入学することになる。このときはじめて汽車に乗り、工業地帯や大都市を目の当たりにする。ソロキンは都市に生活するさまざまな人間像をつぶさに観察する。学校では、ツルゲーネフ、トルストイ、プーシキン、ドストエフスキーの著作を、またマーク・トウェインやディケンズの翻訳を読んだ。そうしたなかで、一九〇四年の日露戦争と一九〇五年の血の日曜日事件はロシア帝国を、その根底から揺さぶった。[11]

こうした事態に直面して、かれの世界観はロシア正教的なものから「進化論」や「自然科学」の哲学にもとづくものへと発展していった。かれは、ミハイロフスキー、ラボルフ、マルクス、エンゲルス、バクーニン、クロポトキン、ダーウィン、スペンサー、プレハーノフ、レーニンなどの著作を熱心に学んだ。[12] そしてかれはいつの間にか、熱心に反帝制を唱える革命家になっていた。かれは一六歳で社会革命党のリーダーとして、学生、労働者、農民に革命の意義を解いていた。しかしかれの思想は個人の創造性や自発的努力など非経済的要素の役割を重視する点で、マルクス主義とは異質のものだった。かれはとうとう反政府活動の容疑で一九〇六年のクリスマス・イブに逮捕される。そしてキネシュマの刑務所に五ヵ月間服役する。かれはその後の展望を見いだせないでいた。ソロキンは叔父のリミアの農場で弟や叔母と二ヵ月過ごした後、ペテルスブルクに行くことを決心する。

ペンキ職人をして汽船と汽車の交通費を稼ぎ出した。[13]

かれはペテルスブルクでアパートの管理人、労働者、家庭教師などをしながら、夜間学校で勉強する日を続けている。一九〇九年五月ペテルスブルク大学の入学試験に合格し、ソロキンは精神脳神経学の学生となった。そこでかれは社会学の研究を決心する。かれは研究所のみならず、高名なロストフツェフ（M. I. Rostovzeff）やパブロフ（Ivan P. Pavlov）などに影響を受ける。

ソロキンは一九一〇年の春に、ペテルスブルク大学に入学する。社会学と法学を専攻する。ソロキンの師となったデ・ロバートリー（de Robertly）は、コントに似た進歩と進化を信じていた。しかし、ソロキンはコントをあまりに哲学的、宗教的だとかんがえていた。かれはローマ、ヨーロッパ、ロシアの理論を学びはじめる。しかし一九一一年には、反政府活動で再び逮捕された。その間、ウェーバー、ジンメル、デュルケム、タルド、パレートなどを研究する。[14] さらにかれは一九一三年にも扇動的な政治的パンフレットを書いたことで逮捕され投獄される。ソロキンは皇帝政府によって三度投獄された。一九一四年に卒業するとともに、最初の著作『犯罪と処罰』を執筆する。

第四章　学者と政治家：革命と戦争

ロシアは第一次世界大戦に参戦する。戦争は民衆にきびしい生活を強いた。ソロキンは大学卒業後、社会学とともに、刑法、刑務所管理学、憲法などを研究する。そして一九一四―一六年のあいだ、マギスター論文の準備をする。ロシアの大学は講師（Privat Dozent）になるために、厳格にマギスターを要求していた。[15] そして一九一六年に大学から犯罪学と行政法のマギスターを受ける。その間、戦争は泥沼化し犠牲者が増えるばかりであった。

ロシアは疲弊していった。ドイツ軍はロシアの奥深くまで侵入し、首都まで飢餓が深刻化していた。厭戦気分が広がり、各地で反乱が相継いだ。一触即発の事態が続いていた。こうしたなかで、ついにニコライ二世は一九一七年二月退位する。後継の皇帝は選ばれなかった。三〇〇年続いたロマノフ王朝はここに崩壊した。

その後の覇権をめぐって、臨時政府とソヴィエトの二重権力状態が作りだされていた。レーニンがスイスから、トロツキーがアメリカから帰国した。ソロキンはレーニン、トロツキー、カーメネフなどボリシェビキの勢力と激しく対立していた。かれは首都の新聞の編集長を勤める一方、社会革命党（SR）右派の国会議員として全ロシア農民運動などを指導する。一九一七年七月、臨時政府のリボフ首相は辞任し、A・ケレンスキー（Alexander Kerensky）が組閣することになる。この時、ソロキンはケレンスキー首相の内閣秘書官（Secretary to Prime Minister）に就任する。[16] この間、かれは生物学者のエレーナ・バラチンスカヤと結婚している。臨時政府は戦争を終わらせることはできなかった。事態は打開できず、混乱の収まる気配はなかった。ケレンスキーはあせっていた。ソロキンは事態の推移に忙殺されていた。

ソロキンは一〇月二五日、体調がすぐれなかった。しかし、いつものように情報収集のために臨時政府の置かれていた冬宮（Winter Palace）に出かけていった。すると大勢のボリシェビキの兵士が冬宮を包囲していた。ケレンスキー首相は前線に出かけ、消息はわからなかった。冬宮は婦人部隊と三〇〇人の士官候補生によって守られていただけだった。ソロキンは冬宮にはいろうとしたが、兵士に追い返されてしまった。かれは一日中ベッドに横たわりながらライフルや機関銃の音を聞いていた。

巡洋艦オーロラが冬宮に向けて砲撃を行い政府に降伏を要求していた。ソロキンは再び外出し市会（Duma）に行った。するとコノヴァロフ（Konovaloff）商工大臣が、電話で冬宮のなかから助けを求めていた。ボリシェビキの兵士が冬宮への突入の機会を窺っていた。ソロキンが冬宮に助けに行く準備をしていたところ、電話越し

にコノヴァロフの絶望した叫びが聞こえてきた。「冬宮の門がこじ開けられた。皆殺しがはじまった。……急げ……暴徒が一階まで達している。すべては終わった。さようなら。ボリシェビキが乱入した。かれらは……」。コノヴァロフの冬宮からの最後のことばは嗚咽にかき消されていた。[17] ソロキンは冬宮と連絡をとっていた最後の人間であった。[18]

ソロキンはこの事件を自分の新聞にボリシェビキの行為を殺人者、盗賊、強奪者などと周囲の反対をおしきり署名記事で書いた。臨時政府は冬宮の陥落後、勢力を回復できなかった。ケレンスキーは敗北したのである。ソロキンは全ロシア制憲会議の選挙にボログダ地区から社会革命党（SR）の議員として立候補し、九〇％以上の得票を得て当選した。しかしこの選挙結果は敗北したレーニンやトロツキーなどボリシェビキによって無視された。かれは逃亡生活を続けざるをえなかった。[19]

ソロキンは一九一八年一月二日に逮捕される。帝政に三度逮捕されたかれは、今度はボリシェビキに逮捕された。かれはピーター・ポール要塞に四ヵ月間投獄される。釈放後、一九一八年一〇月に反革命罪で再逮捕され、今度は死刑の判決を受ける。遺書を書き、日々死刑の執行を待っていた。看守の足音を聞きながら、今度は自分の番かと思う日が続いていた。時間がゆっくりと流れていった。六週間にわたって毎日のように、友人や囚人仲間が射殺されるのを経験し、人間の虐殺行為の恐ろしさ、破壊を目撃した。[20]

かれは獄中で、ペトログラードの労働者学校で、講義を聞いたというボリシェビキの看守に出会っている。かれはソロキンが科学者として国の将来に有益な人物だとして、救出に尽力することを約束する。

ソロキンはレーニンの直接の命令で釈放された。レーニンの執行部にいた以前の友人であるピアタコフ（Piatakov）とカラハン（Karahan）の取り計らいの結果であった。ソロキンはレーニンが党の機関紙『プラウダ』に減刑のことを書くことで、寛容さを示したかったのではないかと想像している。[21] ボリシェビキとの戦いで

兄は銃殺され、弟は獄死していた。[22] 混乱のなかで飢餓はさらに広がっていた。

ソロキンは釈放後、ペトログラード大学での研究生活にもどる。ペトログラード大学では、一九一八年から社会学がカリキュラムに取り入れられていた。かれは一九一九―二〇年のあいだ社会学部の創設に尽力している。二〇年には責任者として社会学部を率いることとなる。[23] この間、法学と社会学に関する本を書いた後、大著『社会学のシステム』全二巻を完成する。やがて革命後、廃止されていた大学の学位が復活する。ソロキンは一九二二年、六時間の口頭試問が続いた後、嵐のような歓迎をもって博士の学位を受けることとなった。かれはペトログラード大学社会学部の最初の社会学の教授となったのである。[24]

ソロキンは一九二一年の冬、大飢饉の発生がいわれていたサマラ州とサラトフ州の調査に出発した。そこでは、餓死寸前の数百万人ともいわれる人々が打ち震えていた。革命後続いていた恐怖で麻痺していたかれの神経も、大飢饉を目の当たりにして押しつぶされそうになったという。ソロキンは飢餓の研究に没頭する。飢餓の研究は出版直前になっていた。[25] そのころ秘密警察は学者や作家を容赦なく襲うようになっていた。

かれは一九二二年九月にまたしても逮捕され、今度は国外永久追放となる。ソロキンはベルリンに送られた。数日の滞在後、亡命ロシア人が集まっていたチェコスロバキアへと向かった。プラハでは、マサリク（T. G. Masaryk）大統領やベネシュ首相に招かれ、歓迎の宴がもたれ、[26] マサリク大統領からカレル大学で教えるようにという申し出を受け入れた。[27] チェコスロバキアで生活が一段落していたところ、アメリカの社会学者であるE・ヘイズ（Edward G. Hayes）とE・A・ロス（Edward A. Ross）に勧められて、イリノイ大学とウィスコンシン大学で「ロシア革命」の連続講義をするため渡米することになる。

第五章　アメリカでの栄光と孤立

ソロキンは一九二三年一〇月にアメリカに着くと、講義のため英語の学習に精を出している。かれは講演の後、ニューヨークに滞在する。半年後に、ミネソタ大学教授に就任する。ミネソタの大学院はシカゴ、コロンビア、ウィスコンシンについで、社会学では四番目の大学院であった。かれは農村社会学、社会学理論史、現代社会問題の三科目を担当することを期待されていた。最初の年の給料は、普通の教授の半額だった。かれはロシアでの経験を、『ロシアの日々からの離別』と『革命の社会学』にまとめて出版する。『革命の社会学』がシカゴの学者など一部には、あまりに主観的だと不評だったが、一般的には好意的に受け止められた。しかしどこからともなく「信用できないソロキン（discredit Sorokin）」というキャンペーンが広がっていた。(28)

ソロキンが社会学者として、事実上はじめてアメリカで問うたのが、『社会移動』である。最初の書評がシカゴ学派の影響の強かった『アメリカ社会学雑誌』に表れた。しかし評者のA・W・リンド（Andrew W. Lind）はわずか一五行で、この本には何もないと、片付けた。C・クーリー（C. H. Cooly）はさすがにこの書評があまりにひどいと、編集長だったE・W・バージェス（Ernest W. Burgess）に抗議した。編集委員会はこの有力会員の抗議で『アメリカ社会学雑誌』に改めて、前のものとは違った好意的な書評を掲載した。(29) この本は、コロンビア大学のF・H・ギディングス（F. H. Giddings）をはじめ多くの学者に歓迎された。

ソロキンのアメリカでの学者としての生活は、けっして平穏なものではなかった。最初の書評は、かれに対するその後の攻撃を暗示するものでもあった。次に出版した『現代社会学理論』は、シカゴの学者やコロンビア大学のR・マッキーバー（Robert Morison MacIver）などには不評だったが、おおむね好評だった。しかしだからといって、それほど高く評価されたわけではなかった。ソロキンの著作は『アメリカ社会学評論』や『社会諸

力』といった学術雑誌においても、批判的に扱われた。しかしソロキンの名は、この二冊の研究書で世界中に知られるようになる。

さらにかれはC・C・ジンマーマン（Carle Zimmerman）との共著『都市・農村社会学原理』やジンマーマンやC・J・ガルピン（C. J. Galpin）との共著『農村社会の体系的資料』三巻を出版する。ミネソタ大学での六年間に多くの成果が出されていった。これらの仕事が評価され、ソロキンは一九三〇年にハーヴァード大学が社会学部をつくるにあたって、A・L・ローウエル（A. L. Lowell）によって、最初の社会学教授として招かれる。社会学部はミネソタ大学の同僚だったC・C・ジンマーマンを準教授として迎え一九三一年に発足する。

この招聘には、ハーヴァード大学の社会学研究への取り組みの遅れとシカゴ大学やコロンビア大学に対する対抗意識があった。しかしソロキンは主任教授ではあったが、名目的なものでしかなく、学外から教員をつれてくる権限をもっていなかった。このことは、かれが社会学部で主導権をとれないことを意味していた。こうしたなかで、社会学部で次第に力をもってきたのが、若いインストラクターのパーソンズ（Talcott Parsons）であった。かれはパーソンズの研究にきびしい態度をとった。[30]

そしてソロキンが期待に答えるべく満を持して発表したのが、四冊からなる大著『社会と文化のダイナミックス』である。このうち三冊までが、一度に出された。かれは膨大な知識を駆使して人類の歴史を、観念的（ideational culture）、理想的（idealistic culture）、感覚的（sensate culture）の三つの文化波動の循環的な繰り返しのなかでとらえようとしたのである。[31]

この本に対して、社会学関係のほとんどの学術誌が書評を掲げた。一部には好意的なものがなかったわけではないが、その反実証主義的性格にごうごうたる非難が巻き起こった。シカゴ学派の指導的立場にあったR・E・パーク（Pobert Ezra Park）は『アメリカ社会学雑誌』で自ら筆をとり、この書物はH・スペンサーの『社会

学』やO・シュペングラーの『西洋の没落』やK・マルクスの『資本論』のような知的業績だと指摘する一方で、この本が厳密な経験主義者には受け入れられないだろうと述べる。[32] そしてこの本が事実を積み上げるより「信仰」を表明した非科学的（unscientific）な試みだと批判することを忘れなかった。[33] 各方面からこの本には膨大な統計資料が使われているけれども、科学的社会学の研究ではないとの非難が浴びせられる。コロンビア大学のR・マッキーバーは、ソロキンの非科学的態度に農民の迷信だと軽蔑の念を募らせていた。[34]

そして非難の声は、ついに足下のハーヴァード大学からも沸き起る。ソロキンが「偽の科学者」だとの非難の声は、内外に広がっていった。ハーヴァード大学の一九三七―三八年の学年暦報告書では、T・パーソンズの『社会行為の構造』が社会学理論に貢献したもっとも重要な著作として掲載されているのに対して、ソロキンの『ダイナミックス』は、ただ思想を呼び起こしたとだけ記されている。[35] すべては暗転したのである。一九三八年から社会学者がソロキンから遠ざかりはじめ、まもなくほとんどの学者が完全にかれを無視するようになった。[36]

社会学部のスタッフにはソロキンに人事権がなかったこともあって、L・J・ヘンダーソン（Lawrence J. Henderson）やE・B・ウィルソン（B. E. Wilson）など社会学とあまり関係のない研究者が大きな権限をもつようになっていた。こうしたなかで、次第にパーソンズが社会学部の重要人物とみなされるようになり、ロックフェラー財団のような有名財団は、パーソンズの研究を援助した。ソロキンは一九四四年にパーソンズにとって代わられるまで社会学の主任教授ではあったけれども、一九三〇年代の終わりには完全に孤立し学内行政では有名無実な存在となっていた。[37] ソロキンはハーヴァードのなかでもアメリカ社会学のなかでも、周辺へと追いやられていった。ソロキンはパーソンズに席を譲らざるを得なくなっていた。

ソロキンは『時間と人間行動』〔バーガー（C. Q. Berger）との共著〕（一九四一）、『危機の時代』（一九四一）、『災害における人間と社会』（一九四二）、『時間と空間の社会学』（一九四三）、『ロシアとアメリカ』（一九四四）と

毎年のように著作を発表していった。しかし反響は、どれもあまり芳しいものではなかった。

ソロキンはハーヴァード大学で、次第に有力となってきた社会学的機能主義と技術的科学主義に距離をとっていた。何人かの同僚はかれを「社会占星術師」といい、ソロキンの方でもかれらを心の狭い事実発見者だとし、統計学を「数霊術」のように扱っていると罵倒していた。[38]

一九四三年、社会学部門の改組と社会関係学部門の創立により、ソロキンは歴史哲学の員外教授となった。一九四四年、パーソンズはノースウェスタン大学から責任者として学部を自由に作らせるという招請状を受け取る。パーソンズはノースウェスタンの方に行く希望を伝えていた。しかしその間、ハーヴァードでは、新しい組織が検討されていた。[39] 一九四四年に、ソロキンは学部長を終える。パーソンズを教授に昇進させるように要請を受ける。しかしかれはジンマーマンの方が、パーソンズよりも適当だと主張した。ソロキンはパーソンズを評価しようとしなかった。ハーヴァード大学はパーソンズの主導のもとに、一九四六年社会関係学部を創設する。これとともに、ソロキンとジンマーマンは周辺に追いやられてしまった。かれの著作は痛烈な批判と嘲りの対象となった。

第六章　対決と追放

ソロキンはリリー財団から援助を受ける。そして一九四八年、かれはハーヴァード創造的利他愛研究センターを設立する。その後も、かれは『社会・文化・パーソナリティ』（一九四七）、『ヒューマニティの再建』（一九四八）、『利他愛』（一九五〇）を次々と出版している。ソロキンは一九五〇年、『危機の時代』を発表する。しかしこの書は『アメリカ社会学評論』で、われわれに中世の偽科学はいらないとまで酷評される。[40] 反響はあいかわら

ずであった。とくに『危機の時代の社会哲学者』（一九五〇）には、厳しい評価がなされた。ウィリアム・コルプ（William Kolp）は「今日、だれがソロキンを読むだろうか？」という。(41)

このことばは、パーソンズの「今日、だれがH・スペンサーを読むだろうか」という書き出しではじまる『社会行為の構造』を念頭に置いたものであることは明らかである。しかしパーソンズがこの文章を書いた時、H・スペンサーの死後三四年が経過しており、あれほど世間を沸かせたかれの著作もさすがに読者を失っていた。これに対して、ソロキンは現役で著作活動を行っているばかりか、その著作はヨーロッパ系言語にとどまらず、アジア系の言語にまで翻訳され、世界中に読者が広がっていた時期である。したがって、もし、W・コルプの見解があたっているとするなら、ソロキンが読まれていなかったのは、かれの周辺つまりハーヴァードの社会学者たちであり、アメリカの社会学者たちであった。確かに、アメリカの社会学者の間では、ソロキンは初期著作が引用されるだけの存在になっていた。とくにハーヴァードの社会学部の廃止とともに、かれは事実上アメリカ社会学から引退したも同然になっていた。ソロキンの名は社会学者のあいだで過去のものとなっていた。

その一方で、かれの著作活動は一向に衰える気配はなかった。『利他愛と行動の探究』（一九五〇）、『ＳＯＳ：危機の意味』（一九五一）、『精神構造と人間のエネルギー』（一九五二）、『愛の方法と力』（一九五四）、『利他的、精神的な成長の様式と技術』（一九五四）などの著作が続々と出版される。マッカーシーによる反共の嵐が吹き荒れるようになると、ソロキンへの不信感はさらに広がっていった。かれはボリシェビキではないとはいえロシア時代に社会革命家であったし、その出自もアジア系の血を引くロシア北部のあやしげな人間であった。

ソロキンはアメリカの社会学界から無視されていたので、ライト・ミルズ（C. Wright Mills）などアメリカ社会学の在り方に批判的な学者に期待していた。E・ティリアキアン（Edward A. Tiryakian）は「ソロキンの思い出」のなかで、五〇年代のソロキンのハーヴァード大学での位置は、コロンビア大学におけるライト・ミルズ

の位置に似ていたという。[42] 細々と続けていたハーヴァード大学でのセミナーも、一九五六年には終わる。

この年、かれは挑発的な名前をもつ『現代社会学と隣接科学の衰退とうぬぼれ』（一九五六）を書いている。この本について、ドナルド・ホートン（Donald Horton）はアメリカの社会学者へのひどい仕打ちだと怒りを露にするとともに、輝かしい経歴を持つ人の哀れさの極致と批判した。[43] これに対して、ソロキンは『アメリカ社会学』の編集者に、ホートンは自分の意見についてだけ述べるべきであって、アメリカ社会学者の名のもとに語るべきではないと非難する。[44]

ソロキンは一九五七年に『アメリカ性革命』を出版する。さらに一九五九年にA・W・ランデン（A. W. Lunden）との共著『権力と道徳』を出版した後、公的な活動から完全に引退する。完全な引退後もかれの活動は衰えなかった。ソロキンは『現代社会学と隣接科学の衰退とうぬぼれ』で、アメリカの社会学者と心理学者を徹底的に批判するとともに、パーソンズが行為の一般理論と社会システム論で展開している理論は、かれの社会・文化・パーソナリティなど一連の著作のアイデアを盗用していると告発した。しかしこれに対して、マリンズ（Nicholas Mullins）は、こうした考え方がアメリカ社会学の標準となっていると非難する。また、シカゴ大学のファリス（Robert E. L. Faris）も、こうした概念の使用方法が「公知に属する」ことだとして、かえってソロキンの告発が非難の対象となっていった。[45]

第七章　社会学界の無視と和解

一九六〇年代の中ごろまでに社会学は社会科学の基礎的な学問分野として広範に受け入れられ定着していた。ソロキンのアプローチはアメリカの社会学界にとって、一九三〇年代ほど大きな影響を与える可能性がなくなっ

ていた。その一方で、主流派となった静的な構造＝機能分析に対する批判が、社会学者のあいだからも高まっていた。また、社会変動を強調したソロキンの理論が、実際のアメリカ社会の動きに適っているように思われた。

ところで、実は一九五〇年代の初期から目立たない形で、ソロキンと社会学会を和解させようとする動きがあった。ソロキンの復帰運動はR・ブレインやR・ビアーステッドを中心にソロキンの批判者を含めて、ねばり強く続けられてきた。一九六三年には、ソロキンを記念する二冊の論文集が相次いで出版される。P・アレンの編集による『ピチリーム・ソロキン』とA・E・ティリアキアン編の『社会学理論、価値、社会学的変化』とである。アレンの本の巻頭でソロキンは「社会学とわたしの精神生活」と題する自伝的文章を寄せている。この本には、A・トインビー、W・ムーア、A・インケルス、R・K・マートン、B・バーバーなど、また、ティリアキアンの本にはパーソンズ、K・デービス、W・ファイアレー、G・ギルヴィッチ、F・クラックホーン、M・レヴィー、C・ルーミース、R・K・マートン、W・ムーアなど、それぞれ社会学界を代表する学者が投稿している。(46)

今やアメリカ社会学会の重鎮となっていたパーソンズが、ソロキンをアメリカばかりでなく、世界の社会学の卓越した指導者だとして敬意を表した。さらにソロキンの再評価に大きな役割をはたしたのが、ライリー（Riley）とムーア（Moore）が「測定」に関して、マートン（Robert K. Merton）とバーバー（Barber）が「科学哲学」に関して評価したことであった。

またかれの自伝『長い旅』の出版も事態の改善に役立った。かれはこの書で、かつての同僚や教え子を誉めている。こうした地味な努力が功を奏し、一九六五年にソロキンはアメリカ社会学会の会長に就任する。それに先立って、今やアメリカの社会学の中心を担うようになっていたパーソンズ、R・マートン、R・ウィリアムズ（Robin Williams）、K・デービス（Kingsley Davis）、G・ホーマンズ（George Homans）、かつての五人の同僚や

教え子が、正式にソロキンの事務所を訪ねた。[47]

このことは、長年のソロキンの汚名が一部とはいえ、拭われたことを意味する。二五年間という長い空白の後、かれは学会の主流にもどってきた。この動きは、アメリカ社会学会に、「ソロキン賞」が設けられたことで仕上げられた。もちろんソロキンの位置づけの変化の底流には、アメリカでの社会学をめぐる状況の変化が大きな役割を果たしていた。ソロキンの社会学もアメリカの社会学会にとって一九三〇年代ほど脅威ではなくなっていた。

ソロキンは一九六八年に、七九歳で亡くなるまで著作活動を続けた。しかしその後の『社会的・文化的移動』（一九六四）、『現代の潮流』（一九六四）、『今日の社会学理論』（一九六六）などの著作には、かつての同業者への鋭い非難は影を潜めている。

ソロキンは自伝で、ロシア北部を兄と二人で遍歴している時に、自分が作ったり修理したりした教会のイコンやリザが見たいと述べている。ソヴィエトの成立はかれを再び故郷に帰ることを不可能にした。遍歴職人時代のかれにとって、イコンやリザを作るのが一番の楽しみだったという。[48] 教会の屋根の上に登る仕事は、危険と隣り合わせであった。教会の屋根から落ちそうになり、兄に危機一髪のところで助けられたこともあった。しかし教会の上からのロシアの大地の眺めは絶景であった。かれは望郷の思いを募らせながら、産業化の影響のないコミ地方の山河を礼賛している。かれは七四歳になっても、まだ高い木の上に登ることができると自慢している。ソロキンの原点は、ロシア北部のコミ地方を兄と二人で漂泊しながらの職人生活であった。かれは村から村へと仕事をもとめて漂泊する生活経験から、書籍からよりもはるかに多くのものを学んだという。[49]

ソロキンの家族はコミ語とロシア語のバイリンガルであった。かれはコミ語を五〇年以上にわたって使わないために、大部分を忘れてしまったのが残念だという。[50] コミにはキリスト教以前の異教的伝統が生きていた。ソロキンは多くの学者が主張するように、自分の理論に神秘的で悲劇的な性格があるとするなら、それは幼年期に経

験した悲劇的ミサや生活経験によるものだろうという。[51]

ソロキンの死の翌年、一九六九年には遺稿集として『社会学・過去・現在・未来』が出版された。さらに一九七二年には、G・C・ハレン（G. C. Hallen）とR・プラサッド（Rajeshwar Prasad）の共編で『ソロキンと社会学』と題する追悼論文集が、インドのアグラにあるサティシュ書店から出版されている。[52] かれはインドで多くの読者をもっていた。このことは、学者の間で英語が通じるインドにおいて、ヒンディー語などへの翻訳がなされたことに象徴されているだろう。一九七五年には、失われたと思われていたロシア時代の最後の著作である『人災としての飢饉』の原稿が発見され、エレーナ夫人によって翻訳され出版された。[53]

第八章　ソロキン評価の知識社会学

日本の社会学者は戦後、圧倒的にアメリカ社会学の影響を受けるようになる。アメリカ社会学が怒涛のように日本に流れ込んできた。その際、ソロキンの社会学は、時代後れの社会学だとされたのである。ハーヴァード大学は、T・パーソンズの時代になっていた。ソロキンの社会学は多くの読者を獲得していたが、とくにかれの研究を深化させようとする社会学者は現れなかった。アメリカから構造・機能主義をはじめ新しい社会学の研究が次々と流入してきたからである。

シカゴの研究者はソロキンの研究を、一貫して非難してきた。シカゴの研究者といってもO・ダンカンは例外であったし、その程度は学者によって異なっている。しかしシカゴの学者は、他のアメリカの社会学者が評価したソロキンの初期の著作すら拒絶した。ソロキンの方でも、ウィリアム・ジェームス（William James）やW・L・トーマス（William Thomas）を評価したが、プラグマティズムの哲学に高い評価を与えなかった。また、

シカゴ学派の黄金時代である一九二〇年代は、パークに指導されていた。R・E・パークはドイツ留学を通じてG・ジンメル（Georg Simmel）の社会学の影響を強く受けていた。しかしソロキンは『現代社会学の理論』で、ジンメルの社会学の「歴史」の欠如をきびしく批判している。[54] その点は、パーソンズの社会学にも通じる点であった。アメリカの社会学者は社会学を「科学的」な学問として成立させることに腐心する。そのことが社会学の〈制度化〉の条件だと思われていたのである。このため少しでも科学的でないと考えられる研究は、徹底的に非難された。とくにソロキンの研究は、そのやり玉にあがった。ソロキンの著作にも、誤解を招きかねない叙述がけっして少なくない。叙述のなかに突如としてラテン語の宗教的な文章が差し込まれていたりすることもめずらしくない。「聖霊より、受肉され人となられし……十字架に架けられ……そして復活された……アーメン」。[55] 延々と四分冊にもわたって書き綴られた主著『社会と文化のダイナミックス』の最後はラテン語のこのような文言で結ばれている。

こうした用語法は、科学的な社会学研究の確立に邁進していた社会学者にとって、非難の対象と写ったのである。社会学の科学性の確立は当時の社会学者にとって、宗教的な使命の性格すら帯びていた。このためにアメリカの社会学会は、厳格な、時には狭隘ともみえる側面をもっていた。とくにシカゴ大学の出身者にそれは顕著であった。無視されたのはソロキンばかりではない。たとえば、L・マンフォード（Lewis Munford）は都市研究者としてさまざまな学問分野で、高名を馳せている。しかしかれは、シカゴ学派の文化や歴史の軽視に対する批判的言説のために言及されることはない。ソロキンの都市研究にいたっては、触れられるにしても、それはL・ワース（Louis Wirth）の「都鄙連続体説」（urban-rural continuum）によって克服される「都鄙二分法説」（urban-rural dichotomy）の提唱者としてなのである。L・ワースの「アーバニズム理論」[56] はその概念の混乱にもかかわらず、科学的研究の枠組みとして社会学者たちのあいだに定着していった。

ソロキンは社会学会と和解する。しかしそれは、長いあいだ対立してきた長老の学者とのあいだでの和解あった。ソロキンの存在はすでに過去のものとなりかけていた。かれの名はともかく、かれの社会学はアメリカにおいて忘れられていた。ソロキンは早くからベトナム戦争に反対していた。しかし後に反戦運動が高まり、パーソンズに代表される主流派の社会学を告発するラディカル社会学が勃興しても、ソロキンの社会学が脚光を浴びることはなかった。ラディカル社会学者たちはライト・ミルズから、ソロキンに目を止めることなく直接、T・ヴェブレン（Thorstein V. Veblen）にまで溯ったのである。[57] ソロキンの学問は、当時アメリカ社会学のあり方を告発していたラディカルな社会学者に影響を与えることはなかった。

日本の社会学界はアメリカの社会学以上に、ヨーロッパの社会学者の研究に影響を受けた研究者の集団がいる。ソロキンはこの人たちのあいだにおいても、あまり評価されなかった。とくにマルクス主義の立場をとる社会学者にとって、かれはA・ケレンスキー内閣を担った社会革命党右派の政治家であり、レーニン自身が「ロシアの反共産主義インテリゲンチィアの、もっとも和解しがたい指導者」と名指しで言及している以上、けっして高い評価を与られる学者ではなかった。日本で社会学の古典が集められた最初の全集となった青木書店の社会学全集においては、ロシアの社会学者としてブハーリンが入っている。かれは豊かな才能を期待されながらも、スターリンの犠牲となった社会学者とされた。しかしソロキンはロシアの社会学者としても、アメリカの社会学者としても着目されなかった。

ところで、レーニンとソロキンの関係も、実のところはっきりとしない点が多い。レーニンの側からソロキンについて言及しているのが確認されるのは、二度である。レーニンは、一九一八年一一月二〇日の党の機関新聞『プラウダ』に、「ピチリーム・ソロキンの貴重な告白」を執筆している。[58]

そこで、レーニンは、ソロキンがエス・エルやメンシェビキの政策が誤りであることを認めたことを評価して

いる。ソロキンは触れていないが、このことが、かれが死刑囚から、釈放される直接の契機となったのであろう。しかしレーニンは三年四ヵ月後の一九二二年三月一二日に、再びソロキンに言及している。かれは雑誌『マルクス主義の旗の下に』に掲載された「戦闘的唯物論の意義について」において、三年前の言及と整合しない形で話をすすめている。レーニンは、ソロキンとかという人などと、まったく知らない人であるような書き出しで、ソロキンのことを「学位をもった坊主主義の従僕、農奴制の支持者」などと非難している。[59] このことが、従来から指摘されてきた『レーニン全集』の編集上の問題点に起因するのか、それとも、最近いわれるようになった脳溢血の発作後レーニンを襲った急激な知能の低下によるものなのかは、にわかには断じられない。

第九章　ソロキンと二一世紀の社会学

ソロキンはペトログラード大学とハーヴァード大学の社会学部の創設に力を尽くしたばかりか、最初の社会学の教授として研究を続けた。行政的なことが不向きと自認しながらも、インド、インドネシア、ラテン・アメリカの大学で社会学部の創設に力を貸している。[60] また、かれの著作は各国語に訳され、世界中に多くの読者をもつ社会学者となっている。ハーヴァード大学にはパーソンズの死後、社会学部が復活している。

社会科学は一九九〇年代後半以降、それまで予想もしなかったような変貌を遂げはじめている。A・ギデンズやI・ウォーラーシュタインはいち早く、そのことを指摘している。[61]

こうしたなかで、ソロキンの社会学は今後、どのように扱われるのだろうか。確かに一部では、ソロキンの再評価がいわれている。しかしそもそもソロキンを評価するといっても、いったい何をどう評価するというのだろうか。一九九〇年代以降、ソロキンの著書の復刊は相次いでいるし、東ヨーロッパでも翻訳が進んでいる。[62] P・

タルバット（Palmer Talbutt）のように、トルストイの人間愛の伝統をもつ歴史と文化のパブリックな社会哲学者とみる見方も出てきている。[63] しかしそれにしても、かれの社会学を読み解くことは、容易なことではない。[64]

社会学者はかれのハーヴァード大学の「創造的利他愛研究センター」（The Harvrd Research Center in Creative Altruism）での「人間愛」に関する著作にはまったく眼もくれなかった。しかし日本でも、社会学像の変容とともに、社会学理論の端緒を「ケア」にもとめる新しい社会学研究が提唱されている。[65] そうしたなかで、ソロキンの晩年の「人間愛」に関する研究は、幾多の可能性を含んでいるといえよう。

ソロキンについてB・ジョンストンは、次のように述べている。かれは複雑で激しい人間であり、社会学者のなかで、もっとも議論の集まる精彩のある人物として残るだろう。ソロキンは時期により、パイオニアであり、司祭であり、預言者であり、賤民であった。このような人間は、いつの時代でも社会の除け者であるが、必要な人間でもある。先人によって踏み固められた道を歩む人びとは、せいぜい社会や業界に一定の貢献をするだけである。これにたいして、卓越した能力の持ち主は、しばしば暴走したり、気難しく見えたりするが、定説の再検討をうながし、新しい発見と発展をもたらすのである。ソロキンはまさに、そうした人間であった。[66]

ソロキンは北ロシアの寒村に生まれ、孤児同然の生活から革命家となり、皇帝政府に三回、ボリシェビキに三回の計六度逮捕され、一度はボリジェビキによって、死刑まで宣告された。九死に一生を得てアメリカに亡命し、今度はアメリカの社会学者を相手に独りで闘ったのである。

アメリカ社会学はシカゴ大学を中心として、一九二〇年代から経験的、実証的な科学的社会学の確立を急いだ。社会学はアメリカの学問として、独自の華を咲かせはじめていた。パーソンズの構造・機能分析も、そうした大きな知的な流れの一環をなしていた。これにたいして、ソロキンはヨーロッパ的学問の伝統をひきずり、社会学をきわめて思弁的、歴史哲学的なものとして構想していた。しかも、かれは強烈なプライドとロシア人的情熱を

もって、勃興してくるアメリカの「科学主義」的社会学の浅薄さを、舌鋒するどく批判し続けたのである。かれはアメリカ社会学の全盛時代に独りで立ち向かい、その発展に抗し続けたといっても過言ではない。しかしかれが闘ったアメリカの社会学に、もはや昔日の面影はない。かといって、かれの時代がやってきたわけでもない。

この急激に変化する時代に、社会学は新しい展望を見出せないまま欧米では学問としては退潮しつつある。かれに死刑まで宣言したソヴィエトは、姿を消した。こうしたなかで、ソロキンの膨大な研究が、今後どのような意義をもつのかは、にわかに判断できるものではない。しかしP・A・ソロキンの名は社会学があるかぎり、社会学史上に異色の光彩を放ち続けるだろう。ただ、かれをどのように評価するのかは、「問い」の立て方しだいである。今日、激しく姿を変えつつある社会学には、そのさまざまな可能性が含まれている。

(1) Mary Ann Pomano(ed.), *Lost Sociologists Rediscovered*, The Edwin Mellen Press, 2002. 本書で他に取り上げられているのは、ジェーン・アダムス（Jane Addams）、ワルター・ベンヤミン（Walter Benjamin）、ジョージ・ヴィンセント（George E. Vincent）、ベアトリス・ウェブ（Beatrice Webb）、ドゥ・ボアス（W. E. B. Du Bois）、ハリエット・マーチノー（Harriett Martineau）、フローラ・トリスタン（Flora Tristan）などである。

(2) Barry V. Johnston, *Pitirim A. Sorokin: An Intellectual Biography*, University Press of Kanzas, 1995. p. x.

(3) Ford, Joseph B., Michel P. Richard, Palmer C. Talbutt(eds), *Sorokin & Civilization*, Transaction Publishers, New Brunswick, N. J., 1996.

(4) Hallen, G. C. & Rajeshwar Prasad(eds.), *Sorokin & Sociology*, Satish Book Enterprize, Agra, 1972. pp. 335-358.

(5) 新明正道監修『現代社会学のエッセンス』（ぺりかん社、一九七二年）。本書の一九九六年の改訂版では、船津衛「ソローキンの理論」が削除されている。最近、日本でソロキンを論じたものは管見のかぎり、拙著「ソローキンの

学問と生涯」（大矢根淳訳『災害における人と社会』文化書房博文社、一九九八年所収）と須田直之教授「回想のP・A・ソロキン―ある亡命社会学者の栄光と孤独」『青森大学・青森短期大学研究紀要』（二二巻、第二号、一九九九年）の二つである。

(6) Don Martindale, *The Nature and Types of Sociological Theory*, Hughton Mifflin Company, Boston, 1960.（新睦人訳者代表『現代社会学の系譜』上、未来社、一九七〇）、山本新『トインビー文明論の争点』勁草書房、一九六九年。

(7) Pitrim A. Sorokin, *A Long Journey*, College and University Service, New Haven, Conneticut, 1963, p. 14.

(8) *ibid*., p. 25.

(9) *ibid*., p. 19.

(10) *ibid*., p. 28.

(11) *ibid*., p. 41.

(12) *ibid*., pp. 44-46.

(13) *ibid*., p. 55.

(14) *ibid*., p. 75.

(15) ロシアの大学のマギスター（マスター）はアメリカのPh.Dやドイツのマギスターよりもはるかに程度の高い資格である。*ibid*., p. 86, fn.

(16) *ibid*., p. 132. Alexander Kerensky, *Russia and History's Turning Point*, Duell, Sloan and Pearce, 1965.（倉田保雄・宮田毅訳『ロシアと歴史の転換点―ケレンスキーの回顧録』恒文社、一九六七年）、Reed, John, *Ten Days That shook the World*, Lawrence & Wishart, 1926（原光雄訳『世界をゆるがした一〇日間』、岩波文庫）、芦田均『革命前後のロシア』自由アジア社、一九五八年。

(17) Pitrim A. Sorokin, *Leaves from a Russian Diary*, E. P. Dutton & Co., 1924, p. 101.

(18) ソロキンが冬の宮殿の陥落直前に電話していたことについては、加瀬俊一『ロシア革命の現場証人』新潮社、一九六八年（二四〇―二四一頁）からも確認できる。

(19) Pitrim A. Sorokin, *Leaves from a Russian Diary*, E. P. Dutton & Co. 1924, pp. 102-109
(20) *ibid.*, pp. 193-194.
(21) その時のレーニンの決定が「ピチリーム・ソローキンの貴重な告白」ではないかと推測される。『レーニン全集』第二八巻、大月書店、一九五八年。
(22) Pitrim A. Sorokin, *A Long Journey*, *op. cit.*, p. 26.
(23) *ibid.*, p. 177.
(24) *ibid.*, pp. 92-93.
(25) *Hunger as a Factor of Human Affairs*, 1975.
(26) マサリク（Thomas G. Masaryk）は大統領になった最初の社会学者である。かれは一九一八年から一九三五年までチェコスロバキアの初代大統領を勤めた。その前に、かれは大学で三二年間哲学と社会学を講義していた。一九〇二年には、シカゴ大学社会学部に集中講義のために招聘されている。この時の講義録が翻訳されている。Dragan B. Schhilinglow (ed.), *The Lectures of Professor T. G. Masaryk at the University of Chicago, Summer 1902*, Associated Univ. Presses, Inc., Cranbury, New Jersy, 1978.（栄田卓弘・家田裕子訳『マサリクの講義録』恒文社、一九九四年）また、かれの著作も一九九〇年代に入って刊行された。Thomas G. Masaryk, *Constructive Sociological Theory*, ed. by Woolfork, Alan & Jonathan B. Imber, Transaction Publishers New Brunswick 1994.
(27) 革命下のロシアからの有名な亡命社会学者として、ユダヤ系のギルヴィッチ（Georges Gurvitch）がいる。一八九四年生まれ、一九二〇年ロシアを去り二一―二四年までプラハ大学準教授、二五年に渡仏し、ボルドー大学、ストラスブール大学で社会学を講じる。しかしナチスに追われてアメリカに亡命する。戦後帰国しソルボンヌ大学などで活躍した。帰仏の一九四六年以降、『国際社会学紀要』を発行する。かれは現象学的社会学として「深さの社会学」を提唱するなど、フランスを代表する社会学者となる。
(28) Pitrim A. Sorokin, *A Long Journey*, *op. cit.*, p. 125.
(29) *ibid.*, pp. 226-229.
(30) 高木和義『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店、一九九二年、一〇二―一〇八頁。

(31) Pitrim A. Sorokin, *Social and Cultural Dynamics*, (4 vols)Poter Sargent, 1937-41.

(32) Barry V. Johnston, *An Intellectual Biography*, *op. cit*., p118.

(33) Lawrence T. Nichols. Sorokin and American Sociology: The Dynamics of a Moral Career in Science, in Joseph Ford, B., Michel P. Richard, Palmer C. Talbutt(eds), *op, cit*., p. 53.

(34) *ibid*, p. 55. R・M・マッキーバー（Robert Morison MacIver）のこの表現には、妙な重みを感じる。というのも、かれは名門オックスフォード大学の卒業生で、一九二九年にギディングス（F. H. Giddings）の後任としてコロンビア大学に迎えられた。マッキーバーはコロンビアの星といわれ、当時もっとも高名な社会学者であり、政治学者であった。しかしかれの生まれは、スコットランド北西にあるヘブリデス諸島の漁村ストーノウェイ（Stornoway）である。そこは、イギリス最果ての地ともいえる。それだけに、かれのソロキンについての農民のあさましさと迷信ということばは、一層のリアリティがある。

(35) *ibid*., p. 54.

(36) Barry V. Johnston, *An Intellectual Biography*. *op. cit*., p. 149.

(37) William Buxton, Snakes and Ladders: Parsons and Sorokin at Harvard, in in Joseph Ford, B., Michel P. Richard, Palmer C. Talbutt(eds), *op. cit*., p. 42.

(38) Roger Williams Wescott, Preface, in Joseph Ford, B., Michel P. Richard, Palmer C. Talbutt(eds), *op. cit*., p. ix.

(39) Barry V. Johnston, *An Intellectual Biography*. *op. cit*., pp. 151-153. 高木和義『パーソンズとアメリカ知識社会』岩波書店、一九九二年一〇八頁。

(40) Lawrence T. Nichols, *op. cit*., p. 58.

(41) Lawrence T. Nichols, *op. cit*., *p. 58*.

(42) *Edward A. Tiryakian, Sorokin Remenerd, Joseph B., Michel P. Richard, Palmer C. Talbutt(eds)*, *ibid*., p. 16.

(43) Lawrence T. Nichols, *op. cit*., p. 58.

(44) Barry V. Johnston, *An Intellectual Biography*. *op. cit*., p. 213.

(45) *ibid*., p. 227.

(46) Tiryakian, A. Edward(ed.), *Sociological Theory, Value, and Sociological Change*, The Free Press of Glencoe, N. Y. 1963. Allen, J. Philip(ed.), *Pitrim A. Sorokin*, Duke University Press Durham, N. C. 1963.

(47) Lawrence T. Nichols, *op. cit*., pp. 60-61.

(48) Pitrim A. Sorokin, A Long Journey, *op. cit*., pp. 30-31.

(49) *ibid*., p. 28.

(50) *ibid*., p. 39.

(51) *ibid*., p. 41.

(52) Hallen, G. C. & Rajeshwar Prasad(eds.), *Sorokin & Sociology*, Satish Book Enterprize, Agra, 1972.

(53) Pitrim A. Sorokin, *Hunger as a Factor of Human Affairs*, The University of Florida Book, 1975.

(54) Lawrence T. Nichols, *op. cit*., pp. 63-64.

(55) Pitrim A. Sorokin *Social and Cultural Dynamics*, *op. cit*., Vol. 4, 1941. P. XXX.

(56) Wirth, Louis, 1964, *On Cities and Social Life*, Chicago University Press.

(57) Roger Williams Wescott, Preface, in Joseph Ford, B., Michel P. Richard, Palmer C. Talbutt(eds), *op. cit*., p. ix. pp. 63-64.

(58) V・I・レーニン「ピチリーム・ソローキンの貴重な告白」前掲書、一一九―一二〇頁。

(59) V・I・レーニン「戦闘的唯物論の意義について」『レーニン全集』第三三巻、大月書店、一九五九年、一二七―一三七頁。

(60) Pitrim A. Sorokin, *A Long Journey*, *op. cit*., pp. 244-245.

(61) Anthony Giddens, *Social Theory and Modern Sociology*, Polity Press, Cambridge, 1987.（藤田弘夫監訳『社会理論と現代社会学』青木書店、一九九八年）、Immanuel Wallerstein, , *Unthinking Social Science: The Limit of Nineteenth-Century Pradigms*, Polity Peess, 1991（本田健吉・高橋章訳『脱＝社会科学』藤原書店、一

九九五年）

(62) Barry V. Johnston, (ed.), *Pitirim A. Sorokin: On the Practice of Sociology*, The University of Chicago Press, 1995. ジョンストンによる伝記とともに、本書はソロキンの著作のアウトラインを知るには絶好の論集である。

(63) Palmer Talbutt Jr., *Rough Dialectics: Sorokin's Philosophy of Value*, with contributions by Lawrence T. Nichols, Editions Rodopi, B. V. Amsterdam 1998, Netherland

(64) 世界の各国では、アメリカやソヴィエトでの評価を踏襲した日本の研究者と異なり、さまざまな評価が断続的になされてきた。

R. F., Cowell, *History, Civilization and Culture: An Introduction to the Historical and Social Philosophy of Pitirim A. Sorokin*, Adam and Charles Black, London, 1952. Ronald Fletcher(ed), *The Making of Sociology : A Study of Sociological Theory*, Volume Two Developments, Nelson, 1971. J. H. Abraham, *Origins and Growth of Sociology*, Penguin Books Ltd., Harmondsworth, Middlesex, England, 1973.

(65) 今田高俊『意味の社会学』東京大学出版会、二〇〇二年。

(66) Barry V. Johnston, *An Intellectual Biography*. *op. cit.*, p. 273.

ソロキンの主要著作

1. *Crime and Panishment*, 1914. (Russian)
2. *Leo Tolstoi as a Philosopher*, 1915. (Russian)
3. *General Theory of Law*, 1919. (Russian)
4. *Elements of Sciology*, 1920. (Russian)
5. *System of Sociology*, (2 vols), 1920-21. (Russian)
6. *Today's Russia*, 1923. (Russian)
7. *Essay in Social Politics*, 1923. (Russian)
8. *Leaves from a Russian Diary*, 1924.

9. *The Sociology of Revolution*, 1925.
10. *Social Mobility*, 1926.（直井優ほか訳『社会移動論』文化書房博文社、刊行予定）
11. *Contemporary Sociological Theories*, 1928.
12. *Principles of Rural-Urban Sociology*, with C. C. Zimmerman, 1929.（吉野正樹訳『都市と農村』巖南堂書店、抄訳、一九四〇年）
13. *A Systematic Source Book in Rural Sociology*, (3 vols), with C. C. Zimmerman & C. J. Galpin, 1930-32.
14. *Social and Cultural Dynamics*, (4 vols), 1937-41.
15. *Time-Budgets of Human Behaviour*, with C. Q. Berger, 1939.
16. *The Crisis of Our Age: The Social and Cultural Dynamics*, 1941.
17. *Man and Society in Calamity*, 1942.（大矢根淳訳『災害における人と社会』文化書房博文社、一九九八年）
18. *Sociocultural Causality, Space*, Time, 1943.
19. *Russia and the United States*, 1944.（岡本順一郎訳『ソ連とアメリカ』東洋経済新報社、一九五三年）
20. *Society, Culture and Personality*, 1947.（鷲山丈司訳『社会学の基礎理論』上・下、内田老鶴圃、一九六一年、一九六二年）
21. *Reconstruction of Humanity*, 1948.（北玲吉訳『ヒューマニズムの再建』文藝春秋新社、一九五一年）
22. *Altruisic Love; A Study of American Good Neighbours and Christian Saints*, 1950.（下程勇吉監訳『利他愛』広池学園出版部、一九七七年）
23. *Social Philosophies of an Age of Crisis*, 1950.
24. *Explorations in Altrusic Love and Behavior*, 1950.
25. *S. O. S. : The Meaning of Our Crisis*, 1950.
26. *Estructura Mental Y Energias Del Hombre*, 1952.
27. *The Way & Power of Love*, 1954.（細川幹夫訳『若い愛　成熟した愛』広池学園出版部、一九八五年）
28. *Forms and Techniques of Altruistic Spiritual Growth*. 1954.

29. *Fads and Fobles in Modern Sociology and Related Sciences*, 1956.
30. *The American Sex Revolution*, 1957.（井上勇訳『アメリカの性の革命』時事通信社、一九五七年）
31. *Power and Morality: Who shall Gurad the Guardian*, with A. W. Lunden, 1959.（高橋正己訳『権力とモラル』創文社、一九五八年）
32. *A Long Journey: A Autobiography of Pitrim A. Sorokin*, 1963.
33. *Social and Cultural Mobility*, 1964.
34. *The Basic Trend of Our Life*, 1964.
35. *Sociological Theories of Today*, 1966.
36. *Sociology of Yesterday, Today and Tomorrow*, 1969.
37. *Hunger as a Factor of Human Affairs*, 1975.

附記

私のような者が、日本の社会学の世界で忘れかけられているソロキンについて、あえて拙稿を書いた経緯について、若干述べさせていただきたい。

私は本稿を、ソロキンの伝記的研究には不可欠なロシア語もできず、しかも二次文献にばかり依拠して書いた。それには、日本の社会学者たちの間で、あまりにソロキンの置かれていた特異な立場があまりにも知られていなかったと思ったからにほかならない。もちろん私もその例外ではなかった。

私は一九九二年、在外研究でケンブリッジ大学に滞在した。出発の直前に中央公論社より、前年度刊行した『都市と権力―飢餓と飽食の歴史社会学―』（創文社）の内容を、一般向けの新書版として執筆するように依頼を受けていた。ケンブリッジ大学図書館で、前著で参考にできなかった文献を探そうと、Hunger をキイワードに文献を探した。すると、思いがけず、ソロキンの遺作 *Hunger as a Factor of Human Affairs*, 1975. を発見することとなった。私はこの分野に社会学者の研究がほとんどないと思っていただけに、このソロキンの文献の見落としを恥じた。

それとともにソロキンの著作として出てきた *Leaves from a Russian Diary*, 1924. に何となく興味をそそられ手

にとった。ソロキンのロシア革命での大きな活躍の意外性ばかりではなく、その臨場感に溢れる叙述に思わず、図書館の五階でむさぼり読むことになってしまった。さらに、日本ではあまりなじみのないインドの書店から、ソロキンについての G. C. Hallen, & Rajeshwar Prasad (eds.), *Sorokin & Sociology*, Satish Book Enterprize, Agra, 1972. が出版されているのを手にした。この本を通じて、それまでとは違ったソロキン像の広がりを知ることができた。また、後日かれの自伝、*A Long Journey*. を一読する機会をえた。そうこうするうちに、いつかソロキンについて、何かを書きたいと思っていた。

一九九五年に、ジョンストンの画期的なソロキンの研究が出版された。もう私のようなものが、あえて駄文を発表することもないと考えていた。そうしたおり、文化書房博文社で企画されていた『社会調査全書』にソロキンの著作が二巻収録されることとなった。この企画には私もかかわっていたので、先に出版された *Man and Society in Calamity*, 1942.（大矢根淳訳『災害における人と社会』文化書房博文社、一九九八年）に大矢根淳氏の好意でソロキンの生涯を付録として掲載させていただいた。しかし紙幅の関係で十分意を尽くせなかったことが、ずっと心残りとなっていた。

今回、川合隆男教授が定年を迎えられるにあたり、学説史家である川合教授を記念するには、教授自身も社会移動論を論じたこともあるソロキンの生涯を再論するのが良いと考えた。同僚の鹿又伸夫氏にその話をしたところ、須田直之教授がソロキンについての論文を発表していると教えてくれた。さらに同氏は、後日「回想のP・A・ソロキン」と題する論文のコピーまで届けてくださった。須田教授は一九六二年ワシントンで開催された第五回の世界社会学会議で、ソロキンに会ったことがあるとのことである。しかしその時点では、ソロキンがこのような経歴をもつとは思わなかったと伝えている。ジョンストンの研究は氏にとっても大きな刺激になったようである。須田教授の論文は貴重な研究として執筆の参考にさせていただいた。

ソロキンについては、ソヴィエトの崩壊でロシア側でも研究が進んでいる。かれの自伝については、一九九〇年代のはじめにロシア語訳がでている。ソロキンが L. N. Chadayev, V. V. Vigo, P. S. の匿名で書いた論文も多数明らかになってきているようである。北ロシアを旅したいと思うとともに、北ロシアの史料が集まっているというアルハンゲルスク（Arkhangelsk）地方研究博物館移民史研究センターを一度は訪れたいと思っている。

私は一一年前にはじめてソロキンの *Leaves from a Russian Diary*, を読んだケンブリッジ大学図書館の五階で、偶然この原稿の最後のチェックをしている。研究が進まないままに過ぎていった時間の流れの速さを感じている。

追記

本稿の校正段階で、吉野浩二氏による「日本のソローキン研究」（『一橋研究』第二五巻四号、二〇〇一年）をはじめとする三編の論文に気づいた。参照できなかったことが悔やまれる。